

するための試行錯誤の果てに編みだされたものである。それゆえ、福岡の自然農法の意義はこの「一事」を理解することなくしては十分に理解することはできない。単なる農業技術として福岡の「自然農法」を見ようとするのでは十分ではない。福岡は自然農法を芸術的・宗教的仕事として見ていた。さらにこのような理解を深めて、福岡は自然農法は「此岸」と「彼岸」を結ぶ架け橋であり、それを通して彼岸にいる神に見えることができると言う。

ところで、福岡の自然農法の「自然」の意味は、通常の意味とは若干かけ離れている。例えば、福岡は近代科学以前の「ブッシュマン」の農業は原始農業であるが、自然農法ではない」という。自然農法は有機農法でもないし、単に近代農業を否定するものでもない。自然農法は時空を超越した農法であり、「お釈迦様の時からあり、ガンジーの時からある。」今まで隠されてきた自然のアイデアに近いものを発見し、取り戻す営みであるといえる。人間は介入しない、何もしない農法ではあるが、原生の自然を創りだすものでもない。福岡の自然農法は、陸稲、米麦混播、連続不耕起直播、雑草を抑えるクローバー草生によって成立する。このような組み合わせで、人間の力を借りることなく、土の力と稲や麦の自然そのものの力によって収穫が得られる自然農法を福岡は見出したのである。福岡が自然農法の四大原則と呼ぶ「不耕起」、「無肥料」、「無除草」、「無農薬」は、人間の介入を排除することを目指している。しかし、種の粘土団子を準備するなど全く人間の役割を否定するものではない。また鳥糞を肥料に用いることも認めていたので、肥料を完

全に否定していたのでもない。

福岡の自然農法は多くの人に感化を与えたが、多くの人々は自らの経験に照らし合わせて独自の自然農法を展開している。

岩倉大雲寺妙見の瀧における精神医療をめぐる

河東 仁

文武天皇(六八三―七〇七)の妃となり、後の聖武天皇(七一〇―七五五)を産んだ藤原宮子(？―七五四)という女性がいる。藤原氏繁栄の基礎を固めた藤原不比等(六五九―七二〇)の長女である。宮子は、父の期待を一身に背負っていた、すなわち文武天皇との子ども、それも皇子の出産を期待されていた。ところが首皇子すなわち聖武天皇を出産した直後、「幽憂之病」に陥ってしまった。しかもそれから三十六年ものあいだ他人はおろか皇子とも顔を合わせることがなかった。『続日本紀』巻十二はこう伝えている。

西暦七三八年一月二日、皇太夫人の藤原宮子が光明皇后宮に赴いて、僧正の玄昉法師を引見した。聖武天皇もまた皇后宮に行幸していた。皇太夫人は幽憂な気分陥って、永いこと常人の行動をとれずにいた。この日が誕生日にあたる聖武天皇(首皇子)を出産してから、相まみえることがなかったのである。ところが玄昉法師がひとたび看病するや、穏やかで晤かな気分となった。このため、たまたま皇后宮に行幸されていた天皇と相まみえることが出来た。國中、これを慶び祝わぬものはなかった。

一方、京都府岩倉の大雲寺に、後三条天皇(一〇三四―七

三)の皇女佳子内親王の心的不調と平癒を語る伝承が残されている。

佳子内親王は十八歳のころより、「御心地常ならず在まし」。丈なる御髪を乱して、ただ帷の中に隠れていた。そうしたとき岩倉の大雲寺の十一面観音と閻伽井の水がこうした病に効くと聞き、参籠したところ平癒した。

ただしこの伝承を記す「御香水由来記」は江戸時代後期の作とされ、他に類話を載せた史料はない。それゆえ、大雲寺にて心的不調者の治療が開始された後に創作されたものと思われる(橋本明『治療の場所と精神医療史』日本評論社、二〇一〇年)。だが後三条天皇は藤原氏を外祖父とせず、さらに次の代の白河帝が退位後に院政を始めたという点において、宮子と佳子は藤原氏繁栄の起点と終点に位置する女性という関係にある。

しかし大雲寺の治療場としてより興味深いのは、他の湯治や瀧行そして読経などからなる他の類似施設のほとんどが、付添人を前提としていたのに対して、岩倉の地では付き添い人なしで受け容れていたことである。すなわち病人の家族が一定の「治療費」を払うと、岩倉の茶屋に雇われた「介抱人」と呼ばれる存在が病人を自宅に預かり、瀧病などの治療をおこなうというシステムが出来上がっていたことである。

つとに知られているように、日本の精神医学の礎を築いた呉秀三(一八六五—一九三三)は、一八九五年に刊行した『精神病学集要(後編)』において、精神しようがい者の「家庭的看護」の事例として岩倉を、ベルギーのゲールと並ぶものと評価した。ゲールはベルギー北部にあり、精神しようがい者を町ぐ

るみで受け容れたことで知られる地である。民家に宿泊しながら、教会へ通って治療の儀式を受けるといふ形である。

もちろん全てがゲール、岩倉のいずれにせよ、美名のみで評価できないことは確かである。実際のところ岩倉においては、参籠者を拘束する器具が残されているなど、「家庭的看護」といふ美名から外れる点も多々ある。

しかし福祉の領域において大規模施設から小規模地域密着型施設への移行がおこなわれている現在、地域における精神しようがい者の受け容れに関して、岩倉はさまざまな示唆をもたらしていると思われる。

なお本発表は、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「うつ病者の社会的支援」および「自殺予防」に関するソーシヤルモデル研究・開発の一環である。

幻聴と宗教

大宮司 信

一般に、また素朴に、幻覚は「対象なき知覚」といわれる。精神医学ではその重要さの程度から、単なる物音や音楽とことなり、人間の声の内容となる幻聴が研究の中心となり、これを「幻声」とよぶ。幻覚は語義や歴史からは「思い違い、とりとめのないこと」をいい、錯覚や幻想なども判然と区別しがたい内容であったことが予測されるが、現在この方面に取り組む場合、まずは、上述した幻声が発点となる。

宗教、特に我が国における開教や信仰復興の際の心的体験として、幻視(見神体験)、神がかり(憑依状態)と並んで、神・